2050年　淡路島に移住したある家族の1日

島波家　妻:花30代中盤　夫:蓮30代前　子ども:葵4歳、樹6か月:(2人)

6:00 海辺散歩・在宅ワーク

ヒグラシの声が聞こえる。島波家の朝は早い。夫の蓮は娘の葵を連れてウォーキングがてら散歩に出た。島波家の住むコーポラティブハウスの周りは、地元の建材を利用したエコハウスやリノベーションされた古民家など個性的な家が多い。それらの家は自然とマッチしていて砂浜までの道も気持ちが良い。淡路美観地区でもあり電線地中化などの景観規制が功を奏しているのだろう。

「浜千鳥だ！」砂浜に到着すると葵が走り出した。朝から元気が有り余っている。朝から在宅ワーク中の妻の花が集中できるようにと連れてきてよかった。気軽に自然の中で子どもを遊ばせられるのは有難い。

二人で子育ては豊かな自然の中でしたいと思い妊娠を機に東京から移住してきた。キレイな海と山があって、開発されすぎていない丁度良い感じの田舎感。元々食べることが好きで子どもに健康的なものを食べさせたい二人にとって、オーガニックな食材の種類が豊富なのも魅力的だった。

7:00 自宅で朝食

帰宅して「お腹空いたー」という娘の葵に地元の牛乳を渡すと一気に飲み干した。夫の蓮は玉ねぎとトマト、チーズで簡単なサラダをつくった。素材の味が濃いので軽く塩・胡椒だけでも美味しい。「今日もおいしい」と妻の花からも好評だ。朝から食事が美味しいと幸せだ。

8:00 こども園送り

夫婦二人で子供たちをこども園に送りに行く。自転車の後ろにセットされたチャイルドトレーラーに娘の葵はすぐに乗り込んだ。自転車道路も整備されており送迎もちょっとしたサイクリング気分だ。

こども園は医療施設や健康センター、高齢者施設とも隣接している。色んな用事が一度に済むので便利だ。子供がこども園で熱を出してもすぐに病院にかかることができる。親がすぐに迎えにいけないときは高齢者施設を利用する子育てサポーターが助けてくれる。

こども園に到着すると保育者が「今日は園庭の畑のトマトを収穫するんですよ」と予定を教えてくれた。「阿部のおじさん来る？」と葵が聞くと「来るよ。おいしいトマトの見分け方教えてもらおうね」と答えてくれた。

園児たちの畑仕事に農家さんや畑いじりをしたことがある高齢者の方々がサポートに入ってくれている。葵はトマトの苗植えを教えてくれた阿部さんに懐いている。直売所で見かけたときも話しかけていた。ここのこども園はエディブルスクールヤード(食べられる校庭)の取り組みに力を入れている。食べること、いのちのつながりを学校で教えることが求められる時代に寄り添った教育方法だと思っている。

他にもここのこども園は地震などの災害時の避難場所や食料供給の役割も担っている。有事に食べ物があるだけで人々は随分と落ち着くことができるからだそうだ。樹は生後6か月なので授乳場所やおむつ替えの心配がないこの場所に避難することになっている。

9:00 地場食品の加工販売・企画運営会社へ出勤

妻の花は勤務先の食品を軸にした加工販売・企画運営会社に到着した。淡路島の有機野菜の加工・販売、地元施設への給食供給などが主な事業だ。余剰分は食べる通信として淡路島産の農産物のファンに購入してもらっている。冷凍・保存技術の高度化で鮮度を保ったまま遠隔地にも展開が可能なのだ。

「淡路島の食べ物のファンを滞在型観光に呼び込みたい！」とファン感謝祭の企画を目下検討中。豊かな自然、島千鳥も居る美しい海岸、うずしお、オーガニックな食事、自分で釣りをしてもいい、里山の素材を使ったArtイベント、瓦屋根のある風景、体験してもらいたいことだらけだ。「いっそ長期滞在で全部詰め込む？」と独り言をつぶやきながら企画を絞り込んでいく。

10:00 コミュニティスペースでイベント運営

夫の蓮はコミュニティスペースの運営をしている。「それでは、皆様そろいましたので多様な教育実践の情報交換会を始めます。」オフラインのメイン会場はコミュニティスペースだが、オンラインでの参加が7割ぐらい。今日はファシリテーター兼オンラインツールのサポーターを務める。

淡路島はユニークで多様な教育の機会があることも移住の決め手だった。学ぶ場所は学校だけでなく、VRじゃない世界、自然あふれる島全体だ。地域と学校の交流の中で子供も大人もお互いが学び合う文化が根付いている。

公立校でも自然環境を活かしたプログラムが数多く実践されているのに加え、学校という枠組みにとらわれない学び場、例えば、レッジョエミリア、モンテッソーリ、森の幼稚園などの実践の場も多い。それぞれの良いところをシェアして、学ぶ場の形態や教育法の違いの垣根を越えて必要に応じて取り入れ合っている。

(生あるすべての物に感謝すること、人と自然の関わり方を考えることが共通点かもなぁ)と蓮はそれぞれの実践の話を聞きながら感じていた。

11:00 食品加工工場(CSA/合理的配慮)

妻の花はファン感謝祭の企画を練る中で、(自社の食品加工工場の見学もCSAの一環で有りじゃない？)と思い付いた。

CSA:Community Supported Agricultureは、農家と消費者が連携し、前払いによる農産物の契約を通じて相互に支え合う仕組みである。リスクなども共有して信頼関係を築いていくため消費者が農場見学をすることもある。加工商品になる過程をオープンにするのも良いだろう。

手前みそながら自社工場は働きやすい環境だと思う。従業員全員に対する合理的配慮がなされているので、年齢や障害の有無を問わずそれぞれが特性を生かして役割分担し、必要に応じたテクノロジーも積極的に検討されている。従業員のエンゲージメントも高く、皆が積極的に品質を高めようとしていくので商品の評判も上々だ。

(百聞は一見に如かず、食べる通信のファンの人に実際に訪れてもらうか現場の映像を見てもらおう！)

12:00
社員食堂で昼食

妻の花の職場の社員食堂は一般にも開放しており、地元の高齢者や未就学児連れの親子で賑わう。こども園への道で見かけるクラスメイトの親子や隣接する高齢者施設の利用者と思われる人もちらほら。緩やかに地元のつながりが見えるのも安心感につながる。

今日は夫の蓮も午前中のイベントを終えてやってきた。「私はかわら焼き定食にしようかな、蓮は？」「俺はこっちの生シラス丼にしようかな。」 夫婦二人でお手頃価格の地元産素材の健康メニューを選んでいく。

地域通貨で会計をすませると連動して食事記録のデータも蓄積される。さらに健康的な食生活やアクティビティをしていると健康保険が低料金になるので懐にも優しい。

「葵ったらトマト丸かじりしてる。」「樹は良く寝ているな。」ご飯を食べつつデバイスでこども園の様子を確認してみると、子どもたちも健康的に過ごしているようだった。

13:00
小中一貫校で担い手づくり支援

妻の花は午後から給食を提供する小中一貫校に向かった。この学校は校庭や近くの里山で生徒と農家さんなどコミュニティの皆で小さな農業を実践している。

先人たちが作りあげた地域性に集まるまなざしを守りたい、子どもたちの活躍の場がある地域にしてきたい、例えばSociety2.0を選べる地域を残していきたい、といった人たちがこの実践に参画している。

生徒たちにとっても環境に対する意識向上や学習に加えて、人と自然の関わり方を考えるきっかけにもなっているようだ。高齢者（先駆者）達の知古、知識に触発されて、次の世代の者が新しい文化と社会を作る。そんな関係性が学びの中にデザインされている。

さらに、地元企業が担い手づくりの一助にと、収穫後のメニュー開発や商品加工などにもチャレンジできるよう協力している。食品加工会社も協力しており、生徒たちのアドバイザーとして花がやってきたのだ。

生徒たちは「秋に種まき予定の玉ねぎのヘルシー商品にチャレンジしたい！」との要望があった。花は「玉ねぎには硫化アリルやケルセチンが豊富だから玉ねぎは生活習慣病やがんの予防効果がありますから、良いところに目を付けましたね」とコメント。

他にも「ビタミンB_1の吸収を助けるので豚肉と合わせると疲労回復効果をアップさせたり、食物繊維の豊富なごぼうと合わせると糖尿病予防や肥満防止の効果があったりしますよ」「ケルセチンというポリフェノールも豊富で認知機能改善の可能性もあるらしい」など栄養学の情報を適宜提供しつつ生徒たちのディスカッションを見守った。

14:00
在宅ワークで淡路島PR映像編集

夫の蓮は午前中の情報交換会の映像配信準備や、振り返り記事作成をするために自宅に戻って在宅ワークをしていた。都会なような過度な利便性は不要だが、休憩がてら短時間家事をこなせるような暮らしを豊かにするような利便性は有難いことだ。

「今日の淡路島の多様な教育の実践の取り組みはどれも面白かったなぁ」「淡路島出身者や子育て世代にPRするのに良い材料だ」とつぶやきつつ、移住、長期滞在、親子留学などに狙いを定めて映像のテロップや記事の構成を練り始めた。

15:00
こども園迎え里山行決定

夫婦で子どもたちをこども園に迎えに来た。お互い仕事時間を1日6時間程度にしている。集中力が維持できて効率良く業務を進められるし、家族や地域に使う時間、疲労を回復するための時間も確保できるためwell-beingを実感できる。

淡路島では同じようなライフスタイルの人が多く、地域の保育現場にボランティアが大勢いる。プロフェッショナルな保育士が子どもたちと向き合うことに集中できるので質の高い保育が受けられる。

「葵ちゃん、今日はクッキングの時間に収穫したトマトとナスを使って夏野菜のラタトゥイユ作ったんですよ、途中で味見するとトマトを頬張っていました」「樹くん、お座りが安定してきましたよ！離乳食は白身魚をパクパク食べました」それぞれの担当の保育士さんから子どもたちの様子を聞く。

さらに今日は保育士さんから親に協力要請があった。「葵ちゃんを含めた4人が竹の工作に興味を持ちまして。竹を使ったアート活動を楽しみながら、竹がどこから来るのかを知って里山との付き合い方を考えるきっかけをサポートしたいと思っています。」「週末に里山に親子で遊びに行って材料になる竹を取ってきもらえませんか。」
葵自身がやりたいことなので「竹あんどんがきれいだったの。水鉄砲も作れるんでしょ。山には竹がたくさんあるって教えてもらったの」と幼いながら里山に行きたいとアピールしてきた。

蓮は今日の情報交換会の話題を思い出しながら「レッジョエミリアのプロジェクト活動っぽいですね。親も一緒に真剣に取り組みますね。葵と相談して竹を使って何が作れるか家でアイデアを簡単に試してみます。」と続けた。

16:00
防災公園で子どもを遊ばせる

島波家は防災公園に遊びに来た。「水遊びしたい！」と手押しポンプの方に駆けていった娘の葵を夫の蓮が追いかけていた。水をジャブジャブだしながら「竹で水鉄砲作ったら公園に持ってくるんだ」という葵に蓮は「土曜日に里山に竹を取りにいって作ってみようか」と提案した。
（遊びの中で、竹取りなどで里山に手を入れることが、食材が育つ山や海を保存して、遊べる自然を持続させることにつながるのだと、人と自然の共生を肌で感じてほしいものだ。）子どもたちの興味関心を大事にしながら環境に対する意識や学習につながればと期待した。

小学生や親子連れが遊具やサッカーで遊んでいる。地震などの災害に強い、防災に強い街を実現するために、災害時の避難場所として作られた公園だ。貯水槽から水を汲み上げられる手押しポンプや、授乳やおむつ替えができるトイレがある。また、避難時の防犯にも配慮されてた入口や遊具の設計になっており子どもたちが事故に遭いづらい

「授乳とおむつ替えしてくるから、葵と遊んでて」と妻の花は息子の樹を連れてトイレに行った。トイレにはオムツや液体ミルクの自動販売機があるので、ほぼ手ぶらで利用できる。いざというときに赤ちゃんの世話の一部だけでも安心して出来る環境があるのは有難い。（今では当たり前の設備が30年前ではなかなか無かったってことよね。）
花の母は阪神大震災の被災経験があり、「この公園は震災後にできた防災公園なのよ」「赤ちゃん連れの避難を考えて当時では珍しいチャイルドトレーラーを使ってたのよ」など花の小さい頃から度々防災の話をしてくれたことが頭をよぎった。

17:00
直売所でBBQの材料購入

車を使わなくていい街づくりがされており、防災公園からの自転車+チャイルドトレーラーで今夜のBBQ材料を買いに帰り道にある直売所にも気軽に立ち寄ることができる。

淡路ビーフ、淡路ポーク、玉ねぎ、レタスなど多品目のうえにオーガニックが多いラインナップが魅力的だ。それに、生産者さんとの繋がりが見える安心感、あたたかな人情を感じることができる。高齢の生産者さんが多いが、昔に比べて若い人も増えており、ちょっとした多世代交流の場でもある。

娘の葵が生産者さんに「美味しい牛肉と玉ねぎはどれ？」と尋ねると、「牛肉はきめが細かく、しっとりツヤのあるもの。赤身は赤色がきれいで濃淡にバラツキのないものがお勧め」「玉ねぎは丸くて表面の皮が乾燥していてツヤがあるもの。重みがあるもの。あと、かたくて芽が出ていないものを探してみて」と皆が選び方のコツを気さくに教えてくれる。

18:00
コーポラティブハウスでBBQ

自宅のコーポラティブハウスに帰宅して、妻の花は息子の樹の離乳食の準備をしにキッチンに、夫の蓮と娘の葵は共用部分の中庭へ行きBBQの準備を始めた。

居住希望者同士でコーポラティブハウスの企画・建築の検討を行ったこともあり、ご近所付き合いも盛んだ。クリーンエネルギー関係に勤める同性カップル、高齢者おひとり様、コミュニティ図書館司書（車いす使用）といった顔ぶれで、コミュニティの次世代モデルといえるぐらい多様性に富んでいる。

島波家は昔ながらの標準的な家族だからこそ、家族という枠に縛られない安心感や障害、高齢、みんなが共に暮らせる考え方やノーマライゼーションを子どもたちが体感できる環境に感謝している。

隣人同士が玄関のカギをかけなくても良く、調味料が足りないことから転倒したときに助けを求められる関係なので、勝手に拡大家族と思っている。

淡路ビーフが焼けてきた頃に、図書館司書の榎本さんが帰ってきた。「夕飯がこれからだったら一緒にBBQ食べませんか」と花が誘ったところ「嬉しいです！お腹空いていたところなんです」と笑顔で応えてくれた。

榎本さんが葵に好きそうな絵本の話をしてくれている間に、花と蓮は熱々のお肉を頬張った。子どもがいても食事をちゃんと味わうことができてラッキーだった。

19:00
自宅（エコハウス）で家族団らん

BBQを終えて涼しい部屋に戻りお茶を淹れて家族団らんの時間だ。環境保護の取り組みで水そのものが美味しくなっているので、お茶を楽しむようになった。

コーポラティブハウスは「メイド・イン・アワジ」の建材を使ったエコハウスでもある。環境に優しいのはもちろん、人にも優しい。夏でも夜だと冷房がなくても過ごしやすく、シックハウスなどのアレルギーも出づらく、クリーンエネルギーを活用するので光熱費も抑えられている。さらに、室内で過ごすだけで食・運動などのヘルスケアデータを蓄積することができ、日々の暮らしのアドバイスが提案されるのでウェルネスな生活を送りやすくなっている。

それぞれが今日あったことを話しているうちに時間は過ぎ、まだまだしゃべり続けたそうな娘の葵に「続きはお風呂で話そうか」と夫の蓮が切り上げた。

20:00
子ども寝かしつけ

毎日の寝かしつけの担当は、妻の花が息子の樹、夫の蓮が娘の葵だ。20分も授乳すれば樹は夢の中で花は自由時間だ。

葵はコミュニティ図書館司書の榎本さんおすすめの「きょうはそらにまるいつき」の絵本を読んでと蓮にお願いした。3回も読むと蓮は飽きてきたが、葵は「もう一回」とリクエストがまだまだ続く。（夜間ベビーシッターお願いしたい）と思う蓮であった。

21:00
大学院の情報収集・オンラインMTG（子どもたちに残したい淡路島のカタチ）

妻の花は、移住してきた淡路島をフィールドに医福食農の実践をテーマに研究したいと思い大学院の情報収集をしていた。淡路島でもオンラインやサテライトで学べる環境が増えている。

日本でも社会人になってから大学院で学ぶような生涯学習のニーズが高くなったからだろう。

「今の仕事を通して健康的な食材を軸に農家さんから地域コミュニティの人までのバリューチェーンを作っているわけだから、実践として論文にまとめるなら仕事とも両立できるかも」と妄想を広げるのであった。

1時間かけてようやく寝かしつけを終えた蓮は、これからイタリアの教育者とオンラインミーティングを始めた。コミュニケーション上の言語の壁がほぼないまでに技術が進歩したので世界中で情報交換が活発だ。今夜は淡路島の教育の取り組み紹介や芸術教育の話題だ。

「今日は淡路島内の多様な教育の情報交換会で、公立校の実践の中でもモンテッソーリ教育やレッジョエミリアの要素が盛り込まれたプログラムの報告がいくつかあったよ。ちょうど娘のこども園でもプロジェクト活動のような取り組みに親として協力することになったんだ。」

「イタリアで生まれたそれらの教育法は特にArtや五感を大切にしているものだね。淡路島に根付いている芸術教育にはどんなものがある？」

「人形浄瑠璃などの文化体験や豊かな自然の中での遊びを通じた自然と人との共生や環境への意識付けが日常に溶け込んでいることが、広い意味での芸術教育と言えるかな。そういう風土があるからこそ、自然・芸術系の教育アプローチと相性が良い地域なんだと思うよ。」

（淡路島の先人が作り上げた地域性に集まるまなざしが続くように、淡路島独自の文化や伝統を残し発展させ、文化、歴史、地域愛を継承していきたい。それと同時に、イノベーション、常に変化を求める社会にしていきたい。）

教育の話をしながら子どもたちに残したい淡路島のカタチに想いを馳せる蓮であった。

22:00
就寝

夫の蓮と妻の花も就寝する時間だ。しっかり8時間寝ることは健康に欠かせない。健康増進のライフスタイルは、活力ある明日に繋がるのだ。

読んでくださりどうもありがとうございました。
この別冊：夢シナリオは、未来に、子どもたちに、残したい淡路島のカタチに対する以下の市民の意見をもとに暮らしをイメージするためのたたき台です。

・すでにある淡路島の自然や伝統に誇りを持っており、しっかりと守っていきたい
・上記を推進するために、新しい価値観の創造、チャレンジできる環境づくりが必要
・環境、伝統、もしくは健康でいるために教育が大事

皆さまの中には違ったご意見が沢山あるかと思います。それらのご意見をこれからの2050年のビジョンづくりにつなげていただければ幸甚です。